

Title	民主主義の理解：中学校、高等学校生徒の場合
Sub Title	The Meaning of Democracy to High School Students
Author	横山, 松三郎(Yokoyama, Matsusaburo) 小川, 隆(Ogawa, Takashi) 斎藤, 幸一郎(Saito, Koichiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1953
Jtitle	哲學 No.29 (1953. 3) ,p.251- 270
JaLC DOI	
Abstract	Education for democracy has been the chief concern of the Japanese teacher since after the World War II. For the past seven years, teachers in the primary as well as the secondary schools throughout the country have been untiring in their endeavor to teach the principles of democracy to their pupils. The time is ripe, so it seems to us, to see to what extent they have succeeded in democratizing the young generation of Japan. Essay type answers to a number of questions about democracy were obtained from 328 boys and girls of the Junior and Senior High Schools in Tokyo and Chiba prefecture. On the basis of these data a questionnaire of the multiple-choice type comprising three questions and sixty answers was constructed. The questions were: (1) What are the good points of democracy? (2) What are the things you should do to promote democracy around you? (3) In order to realize democracy in society, what would you do when you are grown up? For each question 20 answers were prepared, which were equally divided into 4 groups. Each of these groups included items dealing with some aspects of (1) peace, (2) freedom, (3) equality, (4) security and (5) responsibility. The subject was asked to choose one answer from each group, which he thought best expressed the ideal of democracy, so that he made 12 choices in all. 2650 boys and girls of the secondary schools in 5 different prefectures of the Kanto district participated in this survey. Statistical analysis of the data showed that there was hardly any regional difference in the choice of the answers to the questions. However, a great age difference was manifest: The younger students tended to choose items dealing with the denial of authority, good and bad and equality. On the other hand, the older students who chose items dealing with rights, duties and freedom were great in number as compared with those who chose the items preferred by the younger. It was further found that with the increase in age, there was a tendency for them to select the same answers inspite of the fact that there was some sex difference.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000029-0251

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民主主義の理解

中学校、高等学校生徒の場合

横山松三郎
小川隆
斎藤幸一郎

I 研究の目的

第二次世界大戦終了後、わが国では主としてアメリカの影響に依り、民主主義教育の必要が叫ばれ、教育の全般にわたつて民主主義の徹底が期せられた。爾来、今日に至るまで七年有余の歳月が経過している。そこで、われわれはこの機会をとらえて、終戦以来のこの民主主義教育が、果たしてどれだけの教育的成果を収め得たかを、被教育者たる中学校、高等学校の生徒達の「理解の程度」及び「理解の仕方」の面から調査しようとした。

II 予備調査

研究は、大きく予備調査と、本調査とに分けることができる。予備調査は、① 本調査のための質問紙作成のため

の基礎となる資料を得ること、② 一九四六年、Rose Zelig (The Meaning of Democracy to Sixth-grade Children. *The Journal of genetic Psychology*. 1950, 76, 263~281.)が、アメリカの児童を対象として行つた調査の結果と我国の場合とを比較すること、の二つの目的で行われた。

1. 予備調査の方法

Rose Zeligの方法とほぼ同様に、生徒に数箇の簡単な質問を課し、これに対する生徒の、論文体の形式に依る比較的自由な解答を求めるようにした。調査の対象となつた生徒は、東京都内及び千葉県下の、中学校一年生と三年生及び高等学校二年生合計三二八名で、その内訳は第一表の通りである。

(第一表) 予備調査の対象となつた生徒数内訳

学 年	性 別	学 校			小 計	計
		都 県	東 京	千 葉		
中 一	男	東 京	中 東 京	五〇	六九	九四
	女	本 納	中 千 葉	一九	二五	
	計	本 納	中 千 葉	二五	二五	
中 三	男	東 京	中 東 京	五六	七九	九八
	女	本 納	中 千 葉	二三	一九	
	計	本 納	中 千 葉	一九	一九	
高 二	男	東 京	高 東 京	三九	七九	一三六
	女	東 京	高 東 京	四〇	七九	
	計	東 京	高 東 京	五七	五七	
計		東 京	高 東 京	五七	五七	三二八

質問は次の五つを設定した。

- (1) 民主主義のよい点はどこなところでしょう。
- (2) 民主主義を實行するのに、あなたは、今、手近な事でどんな事をしたらいいでしょう。
- (3) 将来、世の中に出てから、あなたは、どんな事をして、民主主義を實行しますか。
- (4) あなたの学校では、どんな事で、民主主義が行われていますか。

(5) あなたの学校を民主的な学校にするには、他に新らしくどんな事を計画したらいいと思いますか。

これらの質問は、一枚の半紙に、適宜、解答のためのスペースをあけて印刷された。調査は、学級単位で団体式の方法で実施された。又、調査はいずれも、一九五一年七月から十月の間に行われた。

実施に当つては、筆者又は、その協力者が、直接に教室に赴き、質問紙に就いて説明を行い、説明後、大凡、四、五十分をあえて自由に解答せしめた。質問項目の言葉の意味などに就いては、特に低学年の場合には、調査者が説明をしたが、この際、特に例をあげて説明をするような事は避けた。又、解答に当つては、他人と相談することを禁じ、できる限り具体的に、しかもできれば箇条書きに記入するよう要求した。尙お又、参考事項として、この調査は生徒の思想傾向を診るためのものではない事、及び、調査結果は研究の目的のために必要なものであつて、生徒の所属する学校とは無関係であり、学校の成績等には何の影響もない事を説明し、生徒達の余計な心配や誤解を避けるように努めた。

2. 予備調査の結果

結果の集計に当つては、まず、全生徒の解答の内容を、質問項目別に、できるだけ具体的な形のまま取り出し、次に、これらの解答の中、全く同様か、或いは類似の意味内容を示したものを一まとめにして分類を行い、然る後考察を加える方針を取った。

まず、三二八名の解答を、解答不明のものを除いて、できる限り具体的な形で彼等の書いた言葉をそのまま箇条書きに抜き出して見たところ、全部で二六一四箇の叙述を抜き出すことができた。これらを学年別に見ると、一般に学年が進むにつれて、解答数が多くなる傾向が見られた。そしてこの傾向は、特に質問(1)及び質問(4)に対する解答に於

いて著るしかつた。又、質問項目別に見ると、質問(1)に対する解答数は、他の質問に対する解答数の大凡二倍に相当した。

次に、これら生徒の示した解答二六一四箇を、互に全く同様か、或いは類似の意味内容をもつたものを一まとめにして分類したところ、八〇の項目に分類された。これらの項目に就いて検討したところ、一般的に、次のような結論が得られた。

イ、比較的頻数の多い項目は、あらゆる学年及び男女を通じて、民主主義の綱領ともいうべき内容のもの、即ち、中、高等学校で使用されている教科書等に掲げられている概念的抽象的な言葉が多く見られた。

ロ、学年が進むに従つて抽象的概括的な主張が多くなる傾向が見られた。

ハ、高学年にのみ見出される項目は、低学年の生徒にとつては難解と思われる項目であつた。しかしながら、それは、高学年でも、それ程高い頻数を示してはいなかつた。

なおここで、これら八〇項目の結果を、同様の方法でアメリカの生徒の場合に就いて集計された Rose Zeligs の結果と比較したところ、頻数に依る順位に於いては必ずしも一致しなかつたが、ところどころに、同じ意味を含む語が見出され、又、全く同じとは言えないまでも、内容的に類似の項目が、相当多数に見られた。試みに、われわれの調査の結果、類別された八〇項目を、頻数の多いものの順に二〇項目だけあげて見ると、(1)、男女同権、(2)、多数決制、(3)、自分勝手をしない、(4)、物事を先生と生徒の相談できめる、(5)、人々が仲よく助け合つてゆく、(6)、自発性、(7)、強制の否定、(8)、人権尊重、(9)、人権平等、(10)、義務(責任)を果たす、(11)、他人の意見を尊重し合う、(12)、言論の自由、(13)、他人に親切にする、(14)、よい事が実行される、(15)、自己訓練、(16)、先生と生徒の交際、(17)、生徒が互に協力し合う、(18)、礼儀

III しよう米世の中に於てあなたはどうな事をし
て民主々義を實行しますか？

(1) 次の五つの中あなたが實行しようと思ふものを
一つだけ選んで、前と同じようにしてしるしをつけな
さい。

- イ 政治に關心をもつ。
- ロ 団休行動を尊重する。
- ハ 他国の人と協議する。
- ニ すべての人が無理なく教育されるようにする。
- ホ 貧富を問はず同等にあつかう。

(2) 次の五つの中ではどれでしょう？ やはり前と
同じように一つを選びなさい。

- イ 他人の意見を尊重する。
- ロ リっぱな社会人になる。
- ハ 自分の意見を堂々と述べる。
- ニ 女子の地位の向上に努める。
- ホ 戦争に反対する。

(3) 次の五つの中から前と同じように一つを選びな
さい。

- イ 強さい的な事をしなさい。
- ロ 選挙には必ず投票する。
- ハ よい家庭人となる。
- ニ こまつている人を助ける。
- ホ 職業上の差別をつけない。

(4) 次の五つの中から前と同じように一つを選びな
さい。

- イ 自分の責任を築す。
- ロ 暴力を用いない。
- ハ 仕事をまじめにする。
- ニ 他人を疑へつしない。
- ホ 愛の心をもつて人に接する。

II 民主主義を實行するのに今あなたは手近なこと
でどんな事をしたいでしょう？

(1) 次の五つの中あなたが今やろうと思ふものを一
つだけ選んでしるしをつけなさい。しるしのつけ方は
前と同じです。

- イ 友人とけんかしない。
- ロ 友人の意見を尊重する。
- ハ みんなの使うものをこわさない。
- ニ 物事を生徒の相談できめる。
- ホ 正しいと信ずることはすすんで行う。

(2) 次の五つの中ではどれでしょう？ やはり、前
と同じように一つを選びしるしをつけなさい。

- イ 家のしきたりにとらわれない。
- ロ 兄弟仲よくする。
- ハ 家の仕事を手伝う。
- ニ 自分の家は自分でする。
- ホ 家の中をきれいにする。

(3) 次の五つの中から前と同じように一つを選びな
さい。

- イ 利己主義をやめる。
- ロ 一生懸命勉強する。
- ハ 生徒がたがいに助け合う。
- ニ いばらない。
- ホ だれに対してもひけ目を感じない。

(4) 次の五つの中から前と同じように一つを選びな
さい。

- イ おどかしにくじけない。
- ロ としよりやさしい子供に席をゆずる。
- ハ ずい事をしたりうそを言つたりしない。
- ニ 自分勝手しない。
- ホ わん力をふるわない。

I 民主主義のよい点はどこなところでしょう。

(1) 次の五つの中あなたが最もよいと思うものを一
つだけ選んでしるしをつけなさい。しるしのつけ方は
IIの中をぬりだして■このようにして下さい。

- イ 議和条約がいてい結された。
- ロ 日本経済の再建がなされている。
- ハ 封建的な事をやめる。
- ニ 法律や規則がまもられる。
- ホ 婦人参政権がみとめられる。

(2) 次の五つの中ではどれでしょう？ やはり、前
と同じように一つを選んでしるしをつけなさい。

- イ 人権が尊重される。
- ロ 国民によつて政治がなされる。
- ハ よい事がまもられる。
- ニ 他の国のためにつくす。
- ホ 戦争しない。

(3) 次の五つの中から前と同じように一つを選びな
さい。

- イ 約束をよくまもる。
- ロ 言論の自由がみとめられる。
- ハ 人が無理に強制されな。
- ニ 男も女も同じ権利をもつ。
- ホ 多数決で物事がきめられる。

(4) 次の五つの中から前と同じように、一つを選
びなさい。

- イ 他人に迷わくをかけない。
- ロ 交通道徳をまもる。
- ハ 人々が助け合つてゆく。
- ニ 行動が自由になる。
- ホ き障が防止される。

○注意—人と相談しないで下さい。

通学の状態(○印をつける)	徒歩のみ、自転車、バス、汽車、電車		
家庭の状態(同居の者に○印)	父、母、祖父、祖母、兄、弟、人、姉、妹、人、使用人、人、其他、人		
学校第	学年	組	氏名
男女	生年月日	昭和	年月日
満	歳	月	日
家庭の職業	今日の日附	昭和	年月日

作法、(19)、暴力の否定、(20)、投票（選挙制）となつた。

以上が、予備調査に依つて得られた結果であるが、予備調査を行つた目的は、実は以上述べたような結果を得る事よりは、寧ろ、これから述べる本調査を行うための基礎的資料を得る事にあつたのである。一般に、一つの調査を行うために、質問紙を作成するような場合、単に研究者が自己の常識なり思いつきなりにのみたよつて質問紙を構成してしまふために、実情に即さない調査となり、従つてその妥当性を失う場合が多い。われ／＼は、このような弊に陥らないために、本調査の質問紙の作成に先き立つて、以上のような予備調査に依つて客観的な資料を手に入れ、その基礎の上に立つて、本調査に進む方針を取つたのである。

Ⅲ 本 調 査

1. 本調査の方法

まず、予備調査に依つて得られた八〇項目を、更に概括して見たところ、それらは結局、民主主義の特徴として広く認められている。権力否定、義務、善悪、平等、権利自由の五つの大項目に分類し得ることがわかつた。そして、それら五つの大項目に属する「被調査者の述べた実際の言葉」を、再び、もとの資料（予備調査質問紙に於ける生徒の解答）の中から拾ひ出し、適切な表現の用いられているものを集めて、これを、本調査質問紙作成のための材料とした。この場合、それらの用語が適切であるかどうかには就いては、更に数名の大人の被験者を用いて検討した。

他方、本調査の質問紙に於いては、質問の種類を、

I 民主主義のよい点は、どんなところでしよう。

(第三表) 本調査(第一次)の対象となつた生徒数内訳

中 一														学 年 性	学 校	都 県	小 計	計
女							男											
前橋三中	常北中	河和田中	中妻中	本納中	新治中	目黒十中	前橋三中	河和田中	中妻中	常北中	本納中	新治中	目黒十中	東京中				
群馬	茨城	茨城	茨城	千葉	千葉	東京	群馬	茨城	茨城	茨城	千葉	千葉	東京	東京				
五〇	二二	四五	一八	二七	一七	四五	五〇	五九	二二	一九	一九	二二	六七	五一				
二二四							三〇九											
五三三																		

Ⅱ 民主主義を實行するのに、今あなたは手近なことでもどんなことをしたらいいでしょう。

Ⅲ 将来、世の中に出てからあなたは、どんな事をして民主主義を實行しますか。

の三つに限定し、予備調査に於ける質問の(4)及び(5)に相当する質問は除外した。これは、予備調査の結果から、各学校内の事項に関して質問したところの質問(4)及び(5)は、それぞれの学校の特殊な事情があまりにも多く解答に反映し過ぎそのため種々雑多な内容のものとなつた為に、本調査の質問としては、不適當と認められたからである。

解答の形式としては、予備調査では、比較的自由な論文体の形式で解答を要求したのに対し、この本調査では、各質問に対し、五箇の選択肢から成る多肢択一法の形式をとる事にした。そしてこれらの選択肢の言葉は、すべて、本項のはじめに述べた手続きで集められた「生徒達の述べた言葉」をそのまま

					中 三											
男					女					男						
水戸一高	長生一高	東金高	都立高	東京都高	前橋三中	水戸一中	河和田中	本納中	新治中	目黒十中	前橋三中	水戸一中	茨城大附属中	本納中	新治中	目黒十中
茨城	千葉	千葉	東京	東京	群馬	茨城	茨城	千葉	千葉	東京	群馬	茨城	茨城	千葉	千葉	東京
四六	六二	二一	七九	三三	四四	七八	四七	一六	二〇	三六	四〇	六四	五五	二三	一四	五四
三四〇					二四一					三五四						
										五九五						

採用することにしたのである。

又、各質問ごとに、このような選択肢の組を四組作成した。言いかえれば、各生徒は、解答に際し、一つの質問につき多肢択一法に依る判断を四回要求され、質問が三つあるので、合計一二回の判断が要求されることになる。

従つて、選択肢の総数は、六〇箇となるが、同時にこれらの選択肢の組を作るに当つては、各組の五箇の選択肢はそれぞれ、権力否定、義務、善悪、平等、権利自由の五つの大項目の中から、一つづつ適切なものを取り出してきたのである。しかもこの場合、一組の選択肢の中の各々は、互に出来る限り、意味内容上での重み、及び表現上のニュアンスに於いて、均等に保たれるように考慮した。更に又、各組の選択肢の持つ意味が、配列に於いて、前記大項目に関して、必ずしも同一順序で提示されないようにするために、特に考慮し、その順序はアトランダ

高 二									
女									
前 橋 女子 高	土 浦 二 高	下 館 二 高	長 生 二 高	長 生 一 高	東 金 高	都 立 高	前 橋 高	土 浦 一 高	
群馬	茨城	茨城	千葉	千葉	千葉	東京	群馬	茨城	
五〇	四三	五三	一二五	五	六一	三〇	五一	四八	
三六七									
一八三五							七〇七		

(第四表) 本調査(第二次)で追加された生徒数内訳

中 一				学 年	性	学 校	都 県	小	計
女	男								
水戸市立一中	根郷中	水戸市立一中	慶応普通部						
茨城	千葉	茨城	東京						
六六	九二	五九	一〇七						
六六	二五八								
三三四									

ムに定めた。

以上の手続に依つて作成された質問及び選択肢は、第二表の様式に依り、半紙大の大きさに印刷された。第二表に示されているように、生徒は解答に際し、イ、ロ、ハ、ニ、ホの中のどれか一つを、その符号の右にある二本の線の中をぬりつぶすことに依つて選択するように指示される。そして、この表では示されていないが、例えば、質問Ⅰの(1)に於けるイロハニホの選択肢は、イ、権力否定、ロ、義務、ハ、平等、ニ、権利自由、ホ、善悪の大項目に属しているものであり、(2)では、イ、権利自由、ロ、平等、ハ、善悪、ニ、義務、ホ、権力否定の大項目に属しているものである。その他の各選択肢も何れも、五つの大項目の各々から取り出されたものである。

調査の対象は、関東地方の都県の、中学校一、三年及び高等学校二年男女生徒とし、東京都及び千葉

計	高二						中三					
	女				男		女			男		
	白百合校	水戸女商高	高萩高	佐倉高	高萩高	慶応高	白百合校	中妻中	根郷中	中妻中	根郷中	
	神奈川	茨城	茨城	千葉	茨城	東京	神奈川	茨城	千葉	茨城	千葉	
	四四	九〇	二	四六	四四	九九	三九	二四	四四	一九	四〇	
	一八二				一四三		一〇七			五九		
	三二五						一六六					
八一五												

第一次調査、及び第二次調査に於いて集計の対象となつた生徒の、都県別、学校別、学年別、性別の実数を示せば、第三表及び第四表の如くである。

2 本調査第一次集計の結果

第一次集計では、前記第三表に示した被調査者一八三五名に就いて、彼等の選んだ選択肢が、権力否定、義務、善悪、平等、権利自由の五つの大項目の何れに属するものが多いかに関し、質問別、都県別性別、学年別に考察した。

県では、筆者又はその協力者が直接、調査校に赴いて調査したが、他の茨城、群馬、及び神奈川の諸県はそれぞれ、県在住の心理学専門家に必要な注意書を添えて、調査用紙を郵送し、調査を依頼し、調査後、返送してもらつた。

調査は、実施の時期に依り、第一次と第二次に分けられる。第一次調査は、一九五一年十二月から一九五二年四月の間に行われ、その期間に、一八三五名が調査された。その後一九五二年五月から同年十月の期間に、更に八一五名が調査され、第一次に於ける調査分を併せて、計二六五〇名が、異つた角度から集計され、これを第二次調査とした。

a 質問別比較

第五表が、質問別の頻数を示した表である。まず右側の合計欄を見ると、全体として、比較的多く選ばれたのは、義務、平等、権利自由の項目に属する選択肢であり、権力否定の項目に属するものが最も少しか選ばれなかった事

(第五表) 質問別比較

生徒数 1835 名	質 問	質 問	質 問	計	
	I	II	III	実 数	%
権 力 否 定	570	456	806	1822	8.3
義 務	832	2899	2268	5999	27.3
善 悪	570	475	1094	2139	9.7
平 等	3047	1687	1400	6134	28.0
権 利 自 由	2302	1800	1738	5840	26.7
計	7301	7317	7306	21944	100.0

(第六表) 都県別比較

都 県 名	東京都	千葉県	茨城県	群馬県	全
生 徒 数	499	432	619	285	1835
権 力 否 定	9.0	8.0	7.7	9.1	8.3
義 務	25.4	29.0	27.9	27.1	27.3
善 悪	9.3	8.6	10.3	11.0	9.7
平 等	27.5	26.7	28.5	29.2	28.0
権 利 自 由	28.8	27.7	25.6	23.6	26.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

になる。

しかしこれを、各質問別に比較して見ると、選ばれた項目別頻数の間に一定の傾向が見られないが、これには、質問の相違からの要因と、組み合わせられた選択肢の間の相対的な重みの相違の要因と二つが考えられ、従つて、これだけの資料からは、これら頻数間のズレを完全に説明する事は不可能である。しかしながら、われわれのこの調査で、このような選択肢の組合せの下に、このような方法で行つた限りでは、平等、義務、権利自由が多く選ばれ、権力否

(第七表) 性別比較

性	男	女	全
生徒数	1003	832	1835
権力否定	8.3	8.1	8.3
義務	27.2	27.4	27.3
善悪	9.6	9.9	9.7
平等	27.5	28.6	28.0
権利自由	27.4	26.0	26.7
計	100.0	100.0	100.0

(第八表) 学年別比較

学 年	中 1	中 3	高 2	全
生徒数	533	595	707	1835
権力否定	11.7	7.4	6.6	8.3
義務	22.2	27.9	30.7	27.3
善悪	13.0	8.3	8.5	9.7
平等	33.3	28.4	23.5	28.0
権利自由	19.8	28.0	30.7	26.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0

定、善悪などは比較僅かしか選択されなかつたと結論することができる。

b 都県別比較

第六表は、都県別に分類して百分率で示したものである。

この表から言えることは、どの項目に就いても、都県間にそれ程大きな差がないということである。しかし、この事は、都市と農村の間に相違がないという事とは別問題である。なぜなら、この表は、単に都県別にわけて比較しただけのものであつて、各都県には都市の学校もあり農村の学校もあるというわけであるからである。

c 性別比較

第七表は、同様にして性別に集計して比較したものである。この表に依つて見ると、性別に見ても、男女生徒の間に殆んど相違があらわれていない。従つて、この調査では、全体として性的な相違も見られなかつたと結論することができる。

d 学年別比較

次に、発達のな変化を見るために、学年別に比較したのが第八表である。学年が進むに従つて、権力否定、善悪、平等の項目に属する選択肢は次第に少く選択され、それに反し、義務、権利自由に属するものは、次第に多く選択されるという相対的な関係が見られる。しかもこの傾向は、第八表には示さなかつたが、男女何れに就いても見られたし、又、都県別、或いは学校別といつたいずれの小単位をとつて見ても、やはり年令的に同様な傾向が見られたのである。

結局、本調査第一次集計の結果を総括すれば、a 質問別、b 都県別、c 性別の集計に於いては、なんら特別

な傾向が見られなかつたのに対し、d 学年別の集計に於いては、そこに、明らかな発達の變化の傾向が見られたのである。

3 本調査第二次集計の結果

第二次集計では、前記第一次集計の結果、学年別には比較的顕著な発達の傾向が見られたので、この、学年に依る発達の傾向を更に分析する方針を取つた。即ち集計に當つては、三つの質問項目に対する各四群の選択肢群、計十二の選択肢群に関して、各群に就き五箇の選択肢毎に、男女別、学年別に選択肢数を数え上げ、これを、被験者数に対する百分率に換算して比較検討した。

なお、その第二次集計で対象とされた生徒数は、前記第三表に示した被調査者一八三五名に、第四表に示した被調査者八一五名が加えられ、合計二六五〇名であつた。

第二次集計の結果を表にして示せば、次の第九・十・十一表の如くである。

これらの表に就いて種々な方向から考察を加えれば以下の如くである。

a 選択に於ける集中化傾向

学年が進むに従つて、特定の選択肢に、生徒の選択が集中してゆく傾向があるかどうかについて検討した。前記三つの表の中の数字はすべて、生徒数に対する百分率であるから、もしすべての生徒が判断のときに、五つの選択肢の中の一つを選択する際に、全くアトランダムに選択したものとすれば、表中の数字はすべて、二〇・〇となる筈である。然しながら、實際は、生徒の選択は、多少ともその中の或る選択肢に多く集まり他の選択肢には少くしか集まらなかつた為に、表に示されている通り、その程度に応じて、二〇・〇から、かたよつた数値を取つたわけである。従つ

(第九表) 質問Ⅰに対する選択頻数百分率

質問 性 別 学 年 生徒数 選 択 肢		Ⅰ 民主主義のよい点はどこなところでしょう？					
		男			女		
		中 1	中 3	高 2	中 1	中 3	高 2
		567	413	483	290	348	549
×	イ 講和条約が締結された	16.0	5.3	3.5	20.7	10.6	6.9
×	ロ 日本経済の再建がなされている	16.0	14.3	9.7	17.6	12.6	9.1
	ハ 封建的な事をやめる	29.3	31.9	39.2	20.3	31.6	21.2
×	ニ 法律や規則がまもられる	19.8	17.9	17.0	26.9	17.5	10.2
	ホ 婦人参政権がみとめられる	17.3	30.7	29.4	15.5	27.3	51.9
○	イ 人権が尊重される	25.6	50.9	56.5	19.0	44.9	54.0
	ロ 国民によつて政治がなされる	45.6	42.6	39.7	43.2	41.7	41.9
×	ハ よい事がまもられる	4.2	2.2	1.0	9.3	2.0	0.2
×	ニ 他の国ためにつくす	6.0	1.2	0.8	6.4	1.7	0.4
×	ホ 戦争しない	19.1	4.8	2.3	22.1	9.8	3.1
×	イ 約束をよくまもる	6.5	3.1	0.8	9.3	3.7	1.5
○	ロ 言論の自由がみとめられる	22.8	38.2	61.4	17.2	35.3	55.3
×	ハ 人が無理に強制されない	10.2	9.0	8.7	10.4	7.5	5.8
×	ニ 男も女も同じ権利をもつ	47.2	36.1	16.4	50.1	40.8	25.2
	ホ 多数決で物事がきめられる	13.8	12.8	12.6	13.1	11.8	12.0
	イ 他人に迷惑をかけない	9.7	12.1	23.6	12.8	12.6	22.8
×	ロ 交通道徳をまもる	7.1	6.5	2.5	10.7	13.0	5.5
×	ハ 人々が助け合つてゆく	71.0	69.0	49.5	61.4	63.0	57.8
○	ニ 行動が自由になる	8.8	10.9	22.2	7.2	10.9	12.2
	ホ 危険が防止される	1.9	1.5	1.9	2.1	1.7	1.5

選 択 肢		質 問 性 別 学 年 生 徒 数		II 民主主義を実行するのに今あなたは手近 なとこでどんな事をしたらいいでしょう					
				男			女		
				中 1	中 3	高 2	中 1	中 3	高 2
				567	413	483	290	348	549
○ ×	イ	友人とけんかしない	2.1	1.0	0.2	0.7	0.3	0.4	
	ロ	友人の意見を尊重する	14.0	32.9	37.3	18.3	27.3	31.0	
	ハ	みんなの使うものをこ わさない	4.9	3.9	1.2	7.2	2.0	1.3	
	ニ	物事を生徒の相談でき める	11.3	9.9	14.7	9.3	9.5	15.4	
○ ×	ホ	正しいと信ずる事はす すんで行く	68.0	48.5	46.9	64.2	59.3	60.4	
	イ	家のしきたりにとらわ れない	4.9	17.9	21.9	7.9	24.7	31.1	
	ロ	兄弟仲くする	13.4	16.7	9.1	16.9	13.5	7.8	
	ハ	家の仕事を手伝う	10.8	9.9	3.9	15.9	10.4	4.9	
× V	ニ	自分の事は自分です	65.1	53.5	62.5	55.5	48.5	55.8	
	ホ	家の中をきれいにする	5.5	1.9	0.6	4.1	2.3	0.5	
	イ	利己主義をやめる	29.3	38.0	36.9	29.7	40.2	47.0	
	ロ	一生懸命勉強する	13.8	6.5	10.4	12.8	4.3	8.9	
× ○	ハ	生徒たがいに助けあう	42.0	46.5	39.2	45.6	40.0	31.3	
	ニ	いばらない	2.8	2.4	2.3	1.7	1.7	0.4	
	ホ	だれに対してもひけ目 を感じない	11.8	7.5	12.2	10.0	13.8	11.9	
	イ	おどかしにくじけない	9.4	9.7	20.1	2.1	4.0	13.3	
× ×	ロ	としよりや小さい子供 に席をゆずる	45.9	37.7	12.2	45.1	39.6	23.9	
	ハ	ずるいことをしたりう そを言つたりしない	16.1	10.4	8.5	20.7	11.8	6.2	
	ニ	自分勝手にしない	22.3	34.6	48.7	22.8	35.1	46.5	
	ホ	腕力をふるわない	6.5	7.7	9.9	10.0	9.2	9.6	

(第十表) 質問IIに対する選択頻数百分率

(第十一表) 質問Ⅲに対する選択頻数百分率

選 択 肢	質 問 性 別 学 年 生 徒 数	Ⅲ 将来世の中に出てからあなたはどんな事 をして民主主義を実行しますか					
		男			女		
		中 1	中 3	高 2	中 1	中 3	高 2
		567	413	483	290	348	549
○	イ 政治に関心をもつ	10.4	10.6	20.9	9.3	12.9	27.2
×	ロ 国体行動を尊重する	12.9	12.8	8.7	12.8	10.3	5.8
×	ハ 他国の人と協調する	15.7	8.0	7.2	18.6	9.2	4.9
×	ニ すべての人が無理なく 教育されるようにする	25.1	15.2	13.0	28.3	21.0	15.0
△	ホ 貧富を問わず同等にあ つかう	35.4	52.9	48.9	31.1	50.5	46.6
	イ 他人の意見を尊重する	12.6	26.6	33.0	12.8	27.0	25.9
	ロ りっぱな社会人になる	28.5	24.7	26.2	31.1	26.7	22.6
×	ハ 自分の意見を堂々と述 べる	39.4	35.4	23.8	35.5	30.7	24.8
	ニ 女子の地位の向上に努 める	2.7	2.9	2.7	4.5	4.3	15.5
	ホ 戦争に反対する	21.7	11.8	14.3	16.2	11.2	10.8
	イ 独裁的な事をしない	12.2	17.4	24.9	12.8	12.6	19.2
	ロ 選挙には必ず投票する	19.6	29.3	27.0	25.2	34.4	42.8
√	ハ よい家庭人となる	12.2	9.0	11.8	11.4	6.9	11.8
×	ニ こまつている人をたす ける	41.1	23.7	10.0	39.7	24.4	11.8
	ホ 職業上の差別をつけない	14.3	20.3	26.0	10.7	20.7	14.2
○	イ 自分の責任を果たす	47.0	65.8	67.5	41.4	54.0	64.0
√	ロ 暴力を用いない	3.4	0.2	1.9	2.4	0.3	0.5
×	ハ 仕事をまじめにする	13.1	6.3	3.7	9.3	6.6	1.3
	ニ 他人を軽べつしない	5.8	6.3	3.5	4.8	4.3	1.3
	ホ 愛の心を以て人に接す る	30.1	21.1	22.9	41.7	35.0	33.0

(第十二表) 選択頻数の学年別集中度

		中 1	中 3	高 2
I	男	247.1	327.8	323.8
	女	214.1	289.2	340.9
II	男	305.3	306.3	308.3
	女	286.7	311.9	346.4
III	男	213.4	239.3	244.3
	女	227.4	245.4	254.8
計	男	765.8	873.4	876.4
	女	728.2	846.5	942.1
総 計		1494.0	1719.9	1818.5

る。こうした傾向は、言いかえれば、高学年になる程、民主主義についての生徒の意見が互よに多く一致したものになつてゆくことを意味する。

b 上昇傾向を示した選択肢

男女とも高学年になるに従つて多く選択される傾向（上昇傾向）を示した選択肢は、第九・十・十一表で○印のつけられてある九箇である。即ち質問Ⅰでは「人権が尊重される」「言論の自由が認められる」「行動が自由になる」であり、質問Ⅱでは「友人の意見を尊重する」「家のしきたりにとらわれない」「おどかしにくじけない」「自分勝手しない」であり、質問Ⅲでは「政治に関心をもち」「自分の責任を果たす」であつた。これらの選択肢は、いずれも民主主義の要点を概括的に或いは端的に述べた言葉であり、その意味で、高学年ほど、民主主義の理解が深まつてゆくこ

て、各数値に関して、二〇・〇との差を求め、その絶対値を学年別に合計して見るならば、このようにして計算された数値は、生徒の選択頻数についての一種の散布度をあらわすものとなり、その数値の大小は、生徒の選択の集中傾向の大小に対応するものとなるわけである。このように計算された数値が、第十二表で示されるものである。表に就いて見ると、男女何れに於いても、生徒の判断が、学年が進むに従つて、特定の選択肢に集中してゆく一般的傾向があることを示している。又、そうした傾向は、男子よりも女子に於いて甚だしい傾向を示している。

とを示している。これは、予備調査の結果に於いて見られた事と相通じている。

c 下降傾向を示した選択肢

男女とも高学年になるに従つて少く選択される傾向（下降傾向）を示した選択肢は、第九・十・十一表で×印のつけられてある二十三箇である。これらは、大部分各学年を通じて一般に選択頻数の少いものであり、又、男女の間に大きな相違も見られない。

d 凹型及び凸型傾向を示した選択肢

男女が共に、中学一年、高等学校二年で比較的多く選択し、中学三年で最も少く選択した（凹型）選択肢は、第九・十・十一表で√印のつけられてある四つである。即ち、質問Ⅱでは「自分の事は自分でする」「一生懸命勉強する」であり、質問Ⅲでは「よい家庭人となる」「暴力を用いない」であつた。これらの四つの選択肢が、特に中学三年に於いて僅かしか選ばれなかつた理由としては、この時期が丁度、いわゆる思春期の第二反抗期に相当する時期である事がその要因として考えられるが、この点に就いては、更に別な調査をまたなくてはならぬ。

男女生徒が共に中学一年、高等学校二年で比較的少く選択し、中学三年で最も多く選択した（凸型）という点で一致していたものは、質問Ⅲに対する「貧富を問わず同等に扱う」の一つだけであつた。この選択肢のみが、どうしてこのような凸型の傾向を示したのか、その理由は今回のこの研究では明らかにする事ができない。

e 性的相違の見られた選択肢

高学年になるに従つて男子よりも女子に依つて多く選ばれる傾向を示した選択肢は、質問Ⅰでは「婦人参政権が認められる」及び質問Ⅲでは「女子の地位の向上に努める」であり、しかもこの二つは、相当に顕著な傾向を示してい

る。しかしながら、同じく女子に関係ある選択肢たる質問Ⅰの「男も女も同じ権利を持つ」は、こうした傾向を示さず、女子にあつても下降傾向を示している。

男女に関して、一方では上昇を示し他方では下降を示すといった選択肢はなかつた。しかし質問Ⅰに対する「封建的なことをやめる」及び質問Ⅲに対する「職業上の差別をつけない」の二つは、男子では明らかに上昇傾向を示したのに対し、女子では中学三年まで上昇し、高校二年で下降して居り凸型となつている。この事は、或いは、思春期以後の女子の保守性を意味するのではないかとも思われる。

又、質問Ⅱに対する「だれに対してもひけ目を感じない」は、男子では中学三年で最低即ち凹型を示し、女子ではその反対に中学三年で最高即ち凸型を示しており、この事は、発達の上で、中学三年頃が、男女の所謂交錯現象の時期——精神的身体的に女子の方が男子に優位を占める時期——に相当している事と考え併せてみる必要がある。

Ⅳ 総 括

予備調査、本調査第一次集計及び同第二次集計の結果は、いずれも多角的な結果であつたが、これらを概括して次の三項目にまとめることができる。

a 民主主義の理解に関して一九四六年アメリカで行われた調査と、今回のわれわれの調査を比較すれば、調査が行われた年代及び被調査者の年齢段階の上で相違があるにしても、調査の結果に於いては、極めて大きな類似が見られた。

b 中学校、高等学校生徒の場合、民主主義の理解に関して、年齢的には明らかな相違が見られ発達的な傾向を知

ることが出来たが、都県別及び性別には特別な大きな相違は見られなかった。しかし都市、農山漁村相互の比較は、今回の研究では行わなかったが、この点に就いては更に追究を要する。

c 各選択肢の個々に当つて分析的に見た結果に於いても、やはり、それぞれに就いて年齢的な相違が見られ、理解の深まつてゆく発達的な方向も知ることができた。又、男女の間の相違も見られ、同時に思春期特有の心性が、このような調査にも反映している様相を見ることができた。